

インド・トイレ事情

インドには都合三回行った。インドに限らず、旅をしていて気になるのは毎日必須のトイレの事情だ。ホテルでだとそうでもないが、昼間外出の町中でもよおすと、トイレの質を選んでられない場合が多い。

インドの基礎知識として聞いていたのは、インド人は左手は不浄として、決して握手はしないし、食事も右手でのみだ。左手はトイレの際の始末に使うからだとも言う。「手で始末!？」と、トイレ異習慣にとどまらず文化的違和感にとまどいを覚えながらインド旅行を続ける。

ニューデリー(No-Toilet)

ニューデリーはインドの首都、それも(オールド)デリーとは別に近代的都市計画によって作られたニュータウンだ。

そのニューデリーの最高級とあってよいホテルに泊まり、高層階のエアコンで快適な自室よりふと下をのぞいてみた。そこは広々とした空き地に瓦礫が散乱する何かの建物の跡なのだが、きっと新しいホテルの建設を予定しているのだろう。がれきの間にテント(差し渡した棒から布を左右斜めに垂らしただけのもの)が見え、インド人の家族が住んでいる。テントのそばには炊事のかまどのようなものが、がれきの石で積み上げ作られている。食事にはそれだとして、残る排泄はどうするのか、と思っていると、朝には各人が空き缶を持って散って行くのではないか。離れたところで、トイレをすませ、缶の水を使い左手で始末しているようだ。

ブータン(自然が呼んでいる)

ブータンはインドとは国が違うが、入国は必ずインド経由となるので一緒に考えた。人種も東アジア系(日本人とそっくり)で、インドとはまるで違うが、「近代的」大国・インドの隣で、その大国に飲み込まれないようがんばっている風がある。でも、トイレ事情——No-Toilet——はそんなに変わりはない。

九州ほどの面積の国土に人口はわずか70万人。インドの過密と反対に極端な過疎国土だ。インドとの国境から首都ティンブーまでの一本しかない国道を二百数十キロ、7～8時間かけてマイクロバスで延々と登るのだが、途中でレストランらしきものは一軒だけしかない。そこでの昼食時のトイレは大丈夫だが、午前午後でのトイレ休憩するトイレがない。トイレがないのはトイレを設置する建物そのものがない、というのが正確だ。ブータン人ガイドに聞くと、住民は誰もいないので道路脇の野原で大自然に向かって、と当然のような顔で指示された。立ち小便、というやつだ。女性も同様なのだが、このような秘境では仕方がない、と理解しているようだ。No-Toiletであることはインドと同じだが、尿意の意味の「自然が呼んでいる(Nature calls me)」と考えると悲惨さはない。



ブータン第二の都市・パロの中心街

ブータンの国情については、山の国・ブータン紀行を参照してください。

マドゥライ（寝台列車トイレ）

マドゥライはインドに 38 ある州の一つ、タミル・ナドゥ（TN）州の主要都市だ。TN 州はインドの最南部の東側を占め、インド全体からすると小さいようだが、州を縦断して分かったのだが、最北部に近いチェンナイ（旧名マドラス）から夜行列車で一晩かけ州の真ん中のマドゥライに着き、そこから車で半日かけてやっと州の南端コモリン岬（インド最南端でもある）に到達するほど広い。



左が前、手洗い水栓がある

この夜行列車、三段式寝台列車となっている、に乗って、寝る前にトイレに行くことになった。気が進まなかったが、写真のように、インド式（日本の和式と似ている）トイレと便座付き洋式トイレがそろい、インド式もヒシヤク水洗なので清潔そのものだった。トイレ内の水道蛇口はおしりを手で洗うためのものだ。一昔前の日本の列車トイレのようなお尻の下に線路が見えるような怖いものでは

ない。あとで調べたら、水洗の行き先は垂れ流し状態だそうだ。沿線はほとんど農地だから、それも良いのかもしれない。

ちなみにインドは鉄道大国だ。イギリス植民地の遺産だが、国土を縦横に敷設された路線の大部分は日本とは違い標準軌（1,435mm・・・新幹線の広軌と同）だ。車両幅も広く、寝台列車は日本の往時の B 寝台（三段ベッドが進行直角に配置）にプラスして通路を隔てた逆の窓側に二段ベッド（進行方向に配置）が組み合わされている。



アレッピー（水郷のトイレ）

インド最南部の西側はケーララ（KL）州だ。前項の TN 州からは印度亜大陸最南端で折り返し北上したところだが、インドの各州で比較すれば小さいほうになる。この KL 州の特徴はアラビア海からの南西モンスーンにより雨期が顕著なことだ。ただ、両州を横断した季節がベンガル湾からの北東モンスーン期（12 月）だったので、TN 州ではたまたまの雨期、KL 州では比較的晴れと逆になってしまった。

一直線にどこまでも続く海岸砂丘地帯の裏に平行する広大な水面が、バックウォーターとして有名だ。この水面が山からの河川を集約し、一箇所ですべて砂丘を断ち切り海へと注ぐ。そこはコーチンという港湾都市で、バスコダガマの時代のポルトガルが貿易拠点とした天然の良港となっている。アレッピーはコーチンからバックウォーターを南に遡ったところにある河港の町だ。バックウォーター・クルーズというものを利用して、この水郷地帯を回った。広大な水面だが、かなりの部分は干拓され農地となっている。その排水先ともなっ

ている細長い水路を、クルーズというより、小さなオンボロ汽船で往復する。



手前のタイル敷きで水浴び？

日本も水が豊富なので、清潔な水洗トイレになって、さらには(温)水でおしりを洗うまでになった。それはインドからの逆輸入かと思ったりした。

途中で一軒の農家に寄った。水路脇の干拓堤防上の建物だ。船頭の知り合いらしい。トイレを借りてびっくりした。インド式トイレだが、床にはタイルが一部敷いてあり、水で清められ、清潔そのものだ。なぜか理由がわかった。清める水が水槽に豊富にあるのだ。でも、自動水洗ではなく、カラフルなプラスチックのヒシヤクで汲み、便器を流す手動水洗だ。排水先の農地または水域は広大だからか、汚染しているようには見えない。



低い堤防の向こうが農地